

14-17行の二大叙事詩及び『マヌ法典』とヒンドゥ教の関わりが記されておらず、「こうして」の意味が理解し難い記述である。

グプタ朝の時代には、従来のヴェーダの宗教(バラモン教)に民間信仰や神々をとりいれてさまざまな教団が生まれた。そこでは、ヴェーダの神々にかわって世界保持者で万能の主宰者であるヴィシュヌと、破壊と創造の神シヴァが主神となった。また、古くから伝承されていた戦争叙事詩『マハーバーラタ』とラーマ王子の物語『ラーマーヤナ』の二大叙事詩がまとめられ、朗唱や演劇をつうじて民衆の文学になった。さらに、王の義務や民法、刑法、人々の生活規範を定めた『マヌ法典』などが編纂された。こうして、インド独自の宗教であるヒンドゥー教が成立した。

グプタ朝の時代には、従来のヴェーダの宗教(バラモン教)に民間の信仰や神々をとりいれてさまざまな教団が生まれ、インド独自の宗教であるヒンドゥー教が成立した。そこでは、ヴェーダの神々にかわって世界保持者で万能の主宰者であるヴィシュヌと、破壊と創造の神シヴァが主神となった。また、古くから伝承されていた戦争叙事詩『マハーバーラタ』とラーマ王子の物語『ラーマヤナ』の二大叙事詩がまとめられ、朗唱や演劇をつうじて民衆の文学になった。さらに、王の義務や民法、刑法、人々の生活規範を定めた『マヌ法典』などが編纂された。